

休暇果つ

松岡隆子

炎天に出てゆく息を整ふる
足元の覚束なくて蝉の穴
考への前も後ろも蝉時雨
身の芯の痛くなるまで滝の前
七月の木賊は丈を競ひけり
不忍池やとほき風見て蓮を見て
蓮池の風の高さは葉の高さ

樹下に会ひ蟬の涼しさ言ひあへる
ゆく雲の白さ眩しく八月へ
日覆ひに潮の香およぶカフェテラス
海の記憶は水いろのサンドレス
休暇果つ貝殻坂に夕日差し

仲秋の九月、ホトトギスの「季寄せ」を見ると最も秋らしい季題が並ぶ。秋の燈、花野、秋草、露、虫、月、などと季題を辿っていくとなんとなく露けき気分になってくる。眸先生には「露」の句が多い。『岡本眸全句集』の季語索引を見ると全部で67句ある。その67句は〈露けしと人恋ふ白湯を沸らしぬ〉で始まり〈杉木立空の露けさ引きしほり〉で終わる。67句のうち「露けし」で詠まれているのが他に24句ある。それらをノートに書き写すことにした。書き写すことに特に意味があるわけではない。ただ先生の露けき世界を身を通して感じたいと思った。いつの間にか私も露けき齢になったようだ。